「神酒」の和訓が「ミワ」であり、「神主部」の和訓が「ハフリヘ」で	捄手折 吾者持而徃 公之頭刺荷(十三・323)	真割持 小鈴文由良尓 手弱女尓 吾者有友 引攀而 峯文十遠仁	☆霹靂之 日香天之百不」足 五十槻枝丹 水枝指 秋赤葉 ☆五十串立 神酒座奉 神主部 之 雲聚玉蔭 見者乏文(十三・22)	しているものを取上げ追究していく。	いった歌の一首一首中に、同じ漢字が用いられ、それらが異なる訓みを 「トヲヲニ」の「トヲ」は「十」の文字を用いている。	巻の長歌は特に長いものはあまりなく、短い長歌が多くみられる。こう この外、「為垂柳 +緒」(十・198)・「枝毛+尾尓」(十・283)等、すべて	でなく、字余り字足らずの不定数音の古体表現が用いられている。この 一方、二十句目に「峯文十遠仁」と「十」を「トヲ」と訓んでいるが、	中心に集められているが、反歌をもたない長歌があったり、定数音通り に続くことから、「五十」の表記しかありえない。	まず巻十三の特色を調べてみると、この巻はさまざまな形態の長歌を われる。このことから勘案すれば、ここの場合も「百字	し考察していく。 、「百不」足」は「五十_	十三から、一首中に表れる同じ漢字が異なる訓みをしているものを抽出 二句目に「五十」を「イ」と訓んでいるが、これは「	究(八)-」(「大阪樟蔭女子大学論集」第41号)に引き続き、今回は巻 二十三句からなる長歌の中に「十」という漢字を二回	本稿は「万葉集―一首中に表れる異なる訓みをしている同じ漢字の研	―一首中に表れる異なる訓みをしている同じ漢字の研究(九)―	萬 葉 集	
王部」の和訓が「ハフリへ」で			_{索聚玉蔭} 見者乏文(十三・222)	のが自然である。	の文字を用いている。したがって、今	1十尾尓」(十・225)等、すべて	- 」を「トヲ」と訓んでいるが、	えない。	ば、ここの場合も「百不」足」は「五十」	、「百不」足」は「五十」の枕詞として使	んでいるが、これは「百不」足 五十日	「十」という漢字を二回用いている。十				

ておよそ二十四例見当たる。次に多いのは「王」という文字で、およそ「スポヨギ」の語言詞言の「著多しのに「プヨ」の文字で、 集中にまい	「ハフリヘ」という言葉は、集中において、ここの外、「祝部等」(十・3」という言葉は長させる
「オホキミーの漢字表記の一番多いのす「大王」の文字で、集中こおい(十九・201)と、およそ五例程、巻十七・十八・十九に限ってみられる。	シーという言葉は見当たらない。
いった例はこの外、(十七・322)・(十八・455)・(十八・446)・(十八・449)・	一方、第三句目の「神主部」は、先に記したように「ハフリへ」と
第二句目の「大皇」を「オホキミ」と訓んでいるが、集中には、こう	ると思う。
「皇」という同じ文字を用いている。	今問題にしている「神酒」の漢字表記を用いる方が字義に適い適切であ
三十八句からなる長歌の第二句目と、第四句目に、「大皇」・「皇子」と	たは「三輪」の二様の文字を用い、どちらも「ミワ」と訓ませているが、
162、和期大皇 日之皇子之	のみである。「神に捧げる酒」の意の漢字表記はこのように、「神酒」ま
巻毛 文尓恐(十三・323)	(二・22)と、「三輪」という漢字を用いているものが一例だけ見当たる
水門成 海毛廣之 見渡 嶋名高之 己許乎志毛 間細美香母 挂	で、この外、「神に捧げる酒」の意に当たる表記は、「神社尓三輪須恵」
伊勢乃國者 國見者之毛 山見者 高貴之 河見者 左夜氣久清之	さて、第二句目の「神酒座奉」の「神酒」の漢字表記はこれ一例のみ
☆八隅知之 和期大皇 高照 日之皇子之 聞食 御食都國 神風之 ****	訓では「ハフリへ」と訓む傾向にある。
	とあり、「神主部」を「カムヌシ」と訓むことを主張されているが、新
で訓むよう揃えたと思えるのである。	二六頁)
書いたものであろうと考えられる。そして、第二句目・第三句目を和訓	書いたのでカムヌシと訓んでよいであらう。(『萬葉集注釋』巻十三・
「ハフリ」を「祝部」と書かず、「神」の文字で揃えるために「神主」と	とのみ書かれてゐるので、ここは神主祝部等をこめて「神主部」と
の場合は、第二句目の「神酒」の「神」の文字を意識して、第三句目も	り」は「祝」(四・七一二、七・一四〇三)、「祝部」(十・二三〇九)
表記は恐らく「祝部」と通常の文字で書いていたものと思われるが、今	全釋に「部はトモガラの意で添へて書いたのみ」とある。「はふ
官」のことを「ハフリ」という言葉でいい表していたことは否めない。	理由は、
と訓んでいるのは、この一例のみで外に見当たらない。考えるに「神	典文字大系・萬葉集』・『萬葉集全釋』等では、「カムヌシ」と訓んでいる。
官たち」の意で表れる。但し、「神主部」という漢字表記を「ハフリへ」	来るところであるが、第三句目の「神主部」を『萬葉集注釋』・『日本古
239)・(十二・281)の二個所に、この漢字を用い「ハフリラ」と訓み、「神	あり、第二句目と第三句目を和訓で訓むよう揃えたという点は理解が出

このように検討してみると、「千歳」は通常文字を自然に用いて書い	名詞として用いられる。この場合、「天皇の召し上るものを奉る国」の
のみである。	第六句目の「御食都國」の「食」は、一般に「食べるもの」をいい、
であり、「万歳」の漢字表記は、ここの外、(十三・33)に一例みられる	当たらない。
てある場合が、圧倒的多数を占めている。次に多い漢字表記は「萬世」	集中においては、「キコシヲス」は「聞食」と書く以外の漢字表記は見
一方、「ヨロヅヨ」の漢字表記は、仮名書例を除いて、「萬代」と書い	食」という使い方は、多く「統治する」という意味の場合に用いられる。
て、集中において「チトセ」は普通「千歳」の漢字表記を用いるようだ。	いる。「食」を「ヲス」と訓むのは敬語動詞として用いているが、「聞
表記が十例程みられ、「千年」が五例程みられるだけである。したがっ	が良いようだとしてるが、諸注は多く「キコシヲス」と訓む方に従って
「チトセ」は集中において、仮名書例を除いてみれば、「千歳」の漢字	第五句目の「聞食」は『萬葉集注釋』では、「キコシメス」と訓む方
「千歳」と「万歳」である。	第五句目と第六句目の連繫句に「食」の文字が用いられている。
二十句からなる長歌の中に「歳」の文字が二回用いられている。	
164、千歳尓 万歳尓	
	いたのは、第四句目の「皇子」の漢字表記を意識したのであろう。
山遠(十三・3236)	「大王」等の漢字があるのにも拘らず、敢えて「大皇」の漢字表記を用
得 山科之 石田之社之 須馬神尓 奴左取向而 吾者越徃 相坂	字を用いて、第二句目の「オホキミ」は「大皇」の漢字以外の表記、
遅乃渡 瀧屋之 阿後尼之原尾 千歳尓 闕事無 万歳尓 有通将	の漢字を用いている。したがって、「ミコ」は「皇子」という通常の文
こ 管木	みよう。集中においては、そのほとんどにおいて、「ミコ」は「皇子」
	次に第四句目の「皇子」を「ミコ」と訓んでいる場合について調べて
いため、極自然に書かれたものと思われる。	用いている。
がって、第五句目の「食」も、第六句目の「食」も外に代りの文字がな	はなく、幾通りか見当たるのにも拘らず、今の場合は「大皇」の漢字を
る。いずれにせよ、「ケ」は「食」の文字しか使われていない。した	皇」が二例程見当たる。このように「オホキミ」の漢字表記は、一定で
國」(六・93)一例、「御食國」(六・133)一例の表記がみられるのみであ	たる。次には「皇」という文字で、およそ五例見当たる。そして、「太
ことを指す。集中において、「ミケツクニ」は、この表記の外、「三食津	十四例見当たる。次に多いのは「天皇」という文字で、およそ七例見当

たようであるが、「ヨロヅヨ」は集中においては稀な文字である「万歳」
の漢字表記を用いたのは、前の句「千歳」の「歳」を意識して、「ヨロ
ヅヨ」も「萬代」の漢字を用いず、「万歳」の漢字を用い統一性を考慮
に入れて書いたと思われる。
☆百不」足 山田道乎天地二 念足橋 玉相者 君来益八
玉桙乃 道
従出 月待跡 人者云而 君待吾乎(十三・232) ビシャ 田付乎不ゝ知 散釣相 君名日者 色出 人可ゝ知 足日木能 山
16、玉相者 散釣相
一方は、「玉相者」を「タマアハバーと訓み、一方は、「散釣相」を三十七句からなる長歌の中に「相」の文字が二回使われている。
「タマアハバーは、この外、「霊合者」(十二・⑪)と「アヘーを「合」「サニツラフ」と訓んでいる。
の文字を用いているのも見当たるが、集中においては、「相」の文字を
用いている場合の方が極めて多く、「合」の文字を用いている場合は少
ない。したがって、今の場合、「タマアハバ」は「玉相者」の表記を用
いるのが自然であると思われる。
もう一方の「サニツラフ」は、この外、集中においては、「左丹頬合」
(十二・31)・「左丹頬経」(十・191)・「狭丹頬相」(三・22)・(四・59)・
「狭丹頬歴」(六・103)・「散追良布」(十六・33)・「散頬相」(十一・233)

左丹頬経=赤みをおびた、の意か。サは接頭語、二は赤土。ツラ典文学全集・萬葉集三』の頭注によると、の漢字表記が各々一例~二例ずつ使われており、その意味は、『日本古

であろう。また、頬紅を化粧品に用いることもあった。(六七頁)フは未詳。「頬」の字を用いたのは赤い頬を健康美としてほめたから

をいい、顔が紅い様子を「散釣相」といっているのだと思う。され、「相」の文字が使われているのは、「相貌」すなわち、「顔かたち」とあるところから勘案すれば、今の場合においては、「散釣相」と表記

あろうか。の「玉相者」の「相」を意識して統一性をもたせようとしたものでのは、「玉相者」の「相」を意識して統一性をもたせようとしたものでれているが、ここに敢えて、「相」の文字を使い、「散釣相」と表記したさて、このように「サニッラフ」の表記にはいろいろな文字が用いら

166、色出^{ィデテテデテ}山従出

ろうか。また、「デテ」と訓むより「イデテ」と訓む方が歌としての表り三句目後の「山従出」の「色」の「イ」と「出」の「イ」と、この句よなければ、「色」出」の「色」の「イ」と「出」の「イ」と、この句よと思われる。これを「イデテ」と訓めば字余りになるが、それを気にしと思われる。これを「イデテ」と訓めば字余りになるが、それを気にしいる。そういうことを念頭において「イデテ」と言の響きの上で調和がとれでいる。そういうことを念頭において「イデテ」と言の響きの上で調れであろう

現法が美しいようにも思える。	もっとも、集中には、「コロモデ」の文字は「袖」のみではなく、多く
一方、「山従出」の「出」も「デル」と訓むより、「イヅル」と訓む方	「衣手」の文字が使われ、次いで「衣袖」の文字が使われている。今の
が歌としての響きがよいように思えるし、七音句の位置するところであ	場合は、少し後の句、「二袖持」の「袖」の文字を念頭において揃えて
る故、「イヅル」と訓むことに異論はない。	書こうとしたものであろうか。
「イヅル」の文字について、集中を調べてみると、「出」の外、「出流」	一方、「二袖」を「マソデ」と訓んでいるが、もともと原文には「三
の二字で「イヅル」と訓んだ例が、(三・23)・(十二・320)・(十六・335)・	袖」とあり「ミソデ」と訓んでいたこと、次の通りである。『日本古典文
(十六・38)の四個所にみられるが、今の場合は「出流」の文字を使わず、	学全集・萬葉集三』の頭注によると、
「色出」の「出」一文字を念頭において、意識的に「山従出」と「出」・	二袖持=マソデは両方の袖。原文「三袖」とあり、ミソデと読ま
一文字を使い揃えたものであろうと思われる。	れるが、自分の衣の袖に美称の接頭語ミがつくことはあり得ないの
	で「三」は「二」の誤りとして改めた。(四〇三頁)
☆妾背兒者 雖」待来不」益立待留 吾 袖 尓 零雪者 凍渡	とあるが、集中において、「三袖」にせよ「二袖」にせよ、この表記は
奴 今更 公来座哉 左奈葛 後毛相得 名草武類 心乎持而	一例のみの珍しい例である。「二袖」を「マソデ」と訓むのは現代からす
二袖持 床打拂 卯管庭 君尓波不ュ相(十三・32)	れば奇異な感じがしないでもないが、「マソデ」という言葉は、「麻蘇埿
	毛知」(二十・439)に仮名書例でみられ、また、「真袖」(七・122)・(十
167、 吾袖 尔 二袖 尔 二袖	一・⒄)という表記でもみられる。このようにみてくると、「二袖」はむ
二十五句からなる長歌の中に「袖」の文字が二回使われている。	しろ「真袖」と表記した方がよさそうにも思える。
一方は、「吾袖尓」を「ワガコロモデニ」と訓み、諸注多くこのよう	結局、この「二袖」の「袖」を念頭において、先の句、「吾 袖 尓」
に訓んでいるが、『萬葉集注釋』では、「(マツ)ワガソデニ」と訓んで	の「コロモデ」は、通常の文字、「衣手」を用いてもよさそうであるが、
いる。しかし、集中にはこの外、「吾袖者」(七・囧)・「袖可礼而」(九・	両者「袖」の文字で揃え、一方は「コロモデ」と訓み、一方は「(マ)
103)・「吾袖尓」(十一・200)等、「袖」を「コロモデ」と訓んだ例が見当	ソデ」と訓んだ。
たり、「袖」の文字を「コロモデ」とも当時は訓んでいたと思われる。	
したがって、ここにおいても「コロモデ」と訓む方に従っておきたい。	☆次嶺経 山背道乎 人都末乃 馬従行尓 己夫之 歩従行者 毎」

手次 懸而思名 雖…恐有」(十三・33)	木雖」在 荒玉之 立月毎 天原 振放見管 珠	田付叫不、知 雖、思 印乎無見 雖、難 奥香乎無見 御袖 徃觸	·雪穂 麻衣服者	吾思 皇子命者 春避者 殖槻於之珠手次 懸而所」	雖」畏 思憑而 何時可聞 日足座而 十五月之 多田波思家武	藤原 王都志弥美尓如」天 仰而見乍	<u>ත</u>	ものであろうか。	場合「背」の文字を用いたのは、「山背」の「背」を念頭においていた フ	「背」の文字の外、「勢」の文字が多く使われ、次で「兄」である。今の 「佃	これに対し「吾背」の「背」は夫の意で用いられているが、集中には る	た記載法であったと見るべきである。	の意識が強かったのであろう。したがって、「山背」はこの場合固定して	「山代」・「山城」と書かれるようになるが、大和の地からすれば山の背後 ・	「ウ」が自然にとれてしまい、「シロ」と訓んだとされている。後には る	「山背」の「背」は「ウシロ」の意であるところから、「ウシロ」のの	168、山背道乎 馬替吾背		(+三・3314)ん	吾持有 真十見鏡尓 蜻領巾 負並持而 馬替吾背	見 哭耳之所」泣 曽許思尓 心之痛之 垂乳根乃 母之形見跡
「雪」を「ユキ」と訓むのは字義に適った訓み方で論ずるまでもない	170、三雪零 雪穂		ある。	この歌からしても明らかであろう。何れにしてもまだまだ考慮の余地が	$(\pm - \cdot \cdot \cdot)^{3172}$	浦廻漕ぐ 熊野舟着きめづらしく かけて思はぬ 月も日もなし	るということである。これは、	今一つ考えられることは、「懸而思名」を「カケテオモハナ」と訓め	フ」と統一性をもって訓むことが出来る。	「偲」と書き誤ったものと考えれば、「思」は「オモフ」、「偲」は「シノ	るのはどうしたことであろうか。「思名」と書くべきところ、「思」を	二様に訓まれ、逆に「シノフ」が「思」「偲」の二種の文字で記されてい	ている。それにしても、一首中に、「思」を「オモフ」と「シノフ」の	・『日本古典文学全集・萬葉集』等、新しいものにはこのように改められ	ることが明らかになり、『萬葉集注釋』・『日本古典文学大系・萬葉集』	のは、近く特殊仮名遣、清濁に関する研究が進んだ結果「シノフ」であ	一方、「思」を「シノハ」と訓むのはどうであろうか。「シヌ」と訓む	もないであろう。	んでいる。「思」を「オモフ」と訓むのは字義に適った訓みで論ずるまで	八十九句の長歌である。その中で「思」を「オモフ」・「シノフ」と訓	169、思 憑而 吾思 雖思 懸而 思 名

が、「雪穂」を「タヘノホ」と訓むのは、「雪」は白いもの故、これを	(十七・आ)等、「己恵」・「許恵」等と「オト」と「コヱ」の区別がなかっ
「栲」とみているのであろうと思うが、やや無理のように思える。案外	たようであるから、今の場合も「カコノコヱ」・「カヂノコヱ」と統一す
「ユキノホ」と訓むことも考えられないこともない。	るか、「カコノオト」・「カゲノオト」と統一出来る可能性もあるわけであ
集中、「雪」を「タヘ」と訓んでいるのはこの一例の孤例である。外	3°
は、「多敝」と仮名書き例が(十四・335)に一例みられ、また、「栲」を	一方、「梶音為乍」の「音」を旧訓では「ト」と訓んでいたのを、新
「タヘ」と訓んでいるものが(一・79)に一例みられるのみである。	訓では「オト」と改めている。「ト」と訓んだのは七音で訓みたいためで
	あろうが、新訓では字余りになるが「オト」の方を主張している。
☆王之 御命恐 秋津嶋 倭雄過而 大伴之 御津之濱邊従 大舟尓	
真梶繁貫 旦名伎尓 水手之音為乍 夕名寸尓 梶音為乍 行師君	☆玉桙之 道去人者 足檜木之 山行野徃 直海 川徃渡 不知魚
何時来座登 大卜置而 齋度尓 狂言哉 人之言釣 我心 盡之山	取 海道荷出而 惶八 神之渡者 吹風母 和者不」吹 立浪母
之 黄葉之 散過去常 公之正香乎(十三・333)	踈不,立 跡座浪之 塞道麻 誰心 勞跡鴨 直渡異六 直渡異六
	(十三・ 33355)
171、水手之音為乍 梶音為乍	
「水手之音為乍」の「音」を「コエ」と訓むことは、今日の我々には	17、直海 直渡異六
奇異な感じがするが、「音声」という語があるように、万葉時代には	「直海」の訓みについて、『萬葉集注釋』においては「ニハタヅミ」・
「喧鳥之 音母不」所」聞」(二・20)・「百鳥之 音名束敷」(六・烱)とあ	「タダウミノ」と二様に仮名がふられている。「タダウミノ」と訓めばこ
るように「音」を「コエ」と訓む例と、「幾許毛散和口 鳥之聲可聞」	こに取上げる範囲ではないのであるが、「ニハタヅミ」と訓むのはどう
(六・92)・「鳴成多頭乃 暁之聲」(六・100)とあるように「聲」を「コ	であろうか。(十三・333)に「潦」を「ニハタヅミ」と訓んでいるところ
ヱ」と訓む例があり、「音」と「声」の区別をあまりしなかったようだ。	から、「ニハタヅミ」に「直海」が当てられたものであろうか。また、
また日本語の方も、「于遇比須能於登企久奈倍尓」(五・41)・「保登等藝	『日本古典文学大系・萬葉集』には「庭直海」の「庭」が脱字したと解か
須 奈久於登波流氣之」(十七・338)と、「於登」と仮名書き例があり、	れているが、「直海」を「ニハタヅミ」と訓むことは多少無理な感じが
また、「毛ゝ等利能 己恵能古保志枳」(五・83)・「鸎能 許恵乎聞良牟」	する。この場合、素直に「タダウミノ」と訓む方が穏当のような気がす

、 $p_{j} = \frac{1}{2}$ いの方を主張してい の方を主張してい た り が で り が で 引 の た を 主張してい た り で り ろ の た で し と 訓 ん で いた こ と い て に り の で し と 訓 ん で いた
3335 直渡異六
ゞ ダウミノ」と二様に仮名がふられている。「タダウミノ」と訓めばこ「直海」の訓みについて、『萬葉集注釋』においては「ニハタヅミ」・
あろうか。(十三・33)に「尞」を「ニハタゾミ」と訓んでいるところに取上げる範囲ではないのであるが、「ニハタヅミ」と訓むのはどう
ら、「ニハタヅミ」に「直海」が当てられたものであろうか。また、
日本古典文学大系・萬葉集』には「庭直海」の「庭」が脱字したと解か

等にもあり、漢字本義に添う訓みをしており論ずるまでもないであろう。一方、「直渡」を「タダワタリ」と訓むことは、(十・203)・(十九・445)る。	
「直海」の「海」を「ミ」と訓むのは、「ウミ」の「ウ」が脱落して17、直海「海道荷出而	
「ミ」となったのである。	L
一方、「海」を「ウミ」と訓むのは漢字本来の訓みとして論ずるまで	あ
もないであろう。	1+
衣谷不→服尓(不知魚取)海之濱邊尓(浦裳無)所→宿有人者(母父☆鳥音之)所聞海尓(高山麻(☞所→為而)奥藻麻(枕所→為)蛾葉之	ス 苗
尓 真名子尓可有六(十三・333)	D
17、所聞 海尓 障所」為而 枕所」為 所」宿有 人者	ゖ゛
「所聞」を旧訓「キコユル」と訓んでいるのを、「カシマ」と訓むべき	ベ
だとしているのが『萬葉集注釋』で、理由は、	
原文「所聞海尓」とあり、舊訓トリガネノキコユルウミニとある。	
この文字に對してこの訓はたしかに正しい。そしてそれでも意味は	
通ずる。しかしさうすると、この先の「いさなとり 海の濱邊に」	
と重複する感がある。ここは固有名詞であった方がふさはしいやう	
に思はれる。さうした疑問を見事に解かれたのが佐竹昭廣君の「萬	

て一戸」の文字を用いているのは記毒者の意図するとこれであれるか	りような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外の	は奇異な感じがする。	6るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むの	こあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例は	はカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)	か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下	聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む
	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあ	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあるが、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字審葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあるが、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字部葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあるが、何れにしても「所「有」の訓みについても、『日本古典文学大系・「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあるが、何れにしても「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。(十六・388)に「所聞多祢」と訓むののるるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあるが、何れにしても「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・「南葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓むののるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むののるが、それにしても、「前聞」にしても「所聞」と訓むのののるが、それにしても、「前聞」にしても、『小師』を「カシマ」と訓むののののに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこかったがで使われている。	障所」・「枕所」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあるのに従っていらっしゃる。(十六・333)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・333)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・333)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・333)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・333)に「所聞多袮」と訓む例はこような形で使われている。「所聞」にしても「所聞」を「カシマ」と訓むのい奇葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓む例はこような形で使われている。「所聞」にしても、「所聞」にしても、秋のであり、「
ここ「〒10て2~1月~こ~60~1110年)魚図15~~60~60~20~20~20~20~20~20~20~20~20~20~20~20~20		oような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外のるが、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字審葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・	9ような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外の?が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字審葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。	らような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外の?が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字?「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・1.6奇異な感じがする。	oような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外の?が、何れにしても「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・16 葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでいいるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むののるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのしあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は	みっか、何れにしても「所宿」にしても「所宿」にしても、外のるが、何れにしても「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・『「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。 は奇異な感じがする。 は奇異な感じがする。 しゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓むの したいのののに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は しまるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は しまるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は しまうな形で使われている。 「所聞」にしても「所」の言いても、『日本古典文学大系・ したいのである。(二四六頁)	らような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外の?が、何れにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこような形で使われている。「所聞」にしても「所」を「カシマ」と訓むのいたま、「のはたいでは、「所聞」にしても、「所聞のではなく、添え字
ベビ「テー゙ー)、ベーシーラー゙゙゙ー゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙		R葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・	R葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・1奇異な感じがする。	R葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・t奇異な感じがする。	R葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・t奇異な感じがする。と訓むのいでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのこあるのに従っていらっしゃる。(十六・338)に「所聞多祢」と訓む例は	R葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。 こあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は	R葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでいしあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例はこか、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下
ベビ「テー゙ー)、マーシーシージュー゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙	?が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字	「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・	「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。	「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・1奇異な感じがする。6るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むの	「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。6るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「亦聞多祢」と訓む例は	「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・3るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのは奇異な感じがする。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例ははカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)	「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例はこか、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下
、C.「FT-DCZ-と目いていっつよ口或音つ気気」のここのであったのです。 のておきたい。それにしても、二十八句からなる長歌の前半部分に、すゆような形で使われている。「所聞」にしても「所宿」にしても、外ののが、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字で葉葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい	?が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字書葉集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓んでい		は奇異な感じがする。	は奇異な感じがする。	は奇異な感じがする。60るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むののるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・338)に「 売 りゃ	は奇異な感じがする。5るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むの5るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例ははカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)	は奇異な感じがする。 あるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むののるが、それにしても普通の感じでは、「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこかるのに従っていらっしゃる。(一四六頁)
、こちちつてととういこいのつより成合したのにのまへでカシマと訓む 、こちちつてととういこいのつより成合したのに、すがしておしても、そういう感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むの 、こちちつてととういこいのつより成合したの「所聞」のまへでカシマと訓むの 、こちちつてととういこいのつより成合したの「下聞」のまへでカシマと訓むの 、こちちつてととういこいのつより成合したの」とついく枕詞であり、下 か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下 か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下 、「所す」にしても、そういう感じで用いられている文字としてあ のような形で使われている。「所聞」にしても、「所聞」のまへでカシマと訓むの しておきたい。それにしても、二十八句からなる長歌の前半部分に、す りておきたい。それにしても、二十八句からなる長歌の前半部分に、す いつつなり、「「「「「「枕所」」にしても、「「「」」の「小「「「「」」の」の」の」の」の」の」の」の」の」の」の」の」の」	◎が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字のが、何れにしても「所」「字としての独立した訓みではなく、添え字で、「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。 (十六・388)に「所聞多称」と訓む例はしか、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下が宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・は奇異な感じがする。	Sるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多袮」と訓む例ははカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む	Jあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例ははカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む	はカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む	か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む	聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む	
○、「「「「「「「「「」」」」」」」であり、「「「」」」」」」」」であり、「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」	?が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字が、何れにしても「所」であり、「所聞多」では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓むのは奇異な感じがする。 (「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・ 「所宿有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・ は奇異な感じがする。 (一四六頁) いたがする。 (一四六頁) いたがする。 (一四六頁) の言文はれるのである。(一四六頁) したがする。 (一四六頁) の言文は、「所聞」のまゝでカシマ」と訓むの のるが、それにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字 のるが、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字	8るが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのしあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む聞い「 が聞多」の「多」が落ちたか、「多	Jあるのに従っていらっしゃる。(十六・郄)に「所聞多祢」と訓む例ははカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む聞いの「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多	はカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む八八○)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多	か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む八八〇)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多	聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む八八○)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多	八八〇)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多
「月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三 「所宿有人者」の「所聞」に思ったか、或いは「所聞」を「カシマ」と訓むののるが、それにしても、通の感じでは、「所聞」をごかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下はあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓むのに 「所宿有人者」の「所聞」にしても、「所聞」を「カシマ」と訓むの は奇異な感じがする。 「所宿有人者」の「所聞」であり、「所聞」を「カシマ」と訓むの に うな形で使われている。「所聞」にしても「所聞」を「カシマ」と訓むの に うな形で使われている。「所聞」にしても、「所聞多祢」と訓むの に うなが、何れにしても、そういう感じで用いられている文字としてあ の っか、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字 いておきたい。それにしても、二十八句からなる長歌の前半部分に、す いている。「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三 「月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	◎が、何れにしても「所」一字としての独立した訓みではなく、添え字で、「所宿有人者」の「所聞」で思出されるのが「所聞」を引かっという。しゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例はこあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓むのいるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのいで有人者」の「所宿有」の訓みについても、『日本古典文学大系・「育業集』では「ヤドレル」・『校本萬葉集』では「イネタル」と訓むのいで前宿有人者」の「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三一一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	Sるが、それにしても普通の感じでは、「所聞」を「カシマ」と訓むのしあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例は聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓むしたるる。(二四六頁)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	こあるのに従っていらっしゃる。(十六・388)に「所聞多祢」と訓む例ははカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む「月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	はカシマノウミニと訓むと云はれるのである。(二四六頁)か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	か、とにかく「鳥が音の」は「かしまし」とつゞく枕詞であり、下聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む八八〇)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	聞」が「所聞」に誤ったか、或いは「所聞」のまゝでカシマと訓む八八○)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多祢」(十六・三	八八〇)の「所聞多」であり、「所聞多」の「多」が落ちたか、「多一月)で、この「所聞」で思出されるのが「所聞多袮」(十六・三

☆此月者 君将→来跡 大舟之 思憑而 (+ = 3344 之 過行跡………大土乎 火穂跡而 ……思友 道之不」知者 獨居而 君尓戀尓 哭耳思所」泣 何時可登 立居而 去方毛不、知…… 吾待居者 黄葉

- (8) 267 -

175、吾待居者 立居而 獨居而 三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「オ」と二様に訓 んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、 「居而」と統一して「キレ」と訓んでも差支えないのではないか。「ヲレ」 は「キレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだいであろ うか。 一方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数 を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている場合は、「伊 の文字で意図的に揃えようとしたものであろうか。以上、巻十三におけ る一二七首の中から、一首中に同じ文字が使われ、それらが異なる訓み をしているものを選出して考察した。 本稿においても、歌をすべて漢字で記載する場合、記載者は一首一首 の記載文字を工夫しながら記載していったということがわかる。 (続)	「() こうした。
(続) (続) (続) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株) (株	○テキストは『萬葉集』本文篇(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之共著、
 175、吾待居者 立居而 獨居而 三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様に訓んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、「「居」と統一して「ヰレ」と訓んでも差支えないのではないか。「ヲレ」は「ヰレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだいであろうか。 集中には、「ヲレ」の文字は、「座」の文字を用いている場合は、「伊都我里座者」(九・1節)・「座者苦毛」(十二・33))この二例のみみられるだけで後は、すべて「居」の文字を用いている。 一方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字は少ない。今の場合は、「居」の文字で意図的に揃えようとしたものであろうか。以上、巻十三における一二七首の中から、一首中に同じ文字が使われ、それらが異なる訓みをしているものを選出して考察した。 本稿においても、歌をすべて漢字で記載する場合、記載者は一首一首の記載文字を工夫しながら記載していったということがわかる。 	(続)
17、吾待居者 立居而 獨居而 三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様に訓んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、「居」」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、「居」」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、「「居」」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだのであろうか。 「方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている場合は、「伊都我里座者」(九・⑪)・「座者苦毛」(十二・翊) この二例のみみられるだけで後は、すべて「居」の文字を用いている。 「方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている場合は、「「」の文字で意図的に揃えようとしたものであろうか。以上、巻十三における一二七首の中から、一首中に同じ文字が使われ、それらが異なる訓みをしているものを選出して考察した。	の記載文字を工夫しながら記載していったということがわかる。
175、吾待居者 立居而 獨居而 三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、「書而」と統一して「ヰレ」と訓んでも差支えないのではないか。「ヲレ」は「ヰレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだいであろうか。 「た」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている。 一方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている。 「方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている。 「方、「キ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字を用いている場合は、「伊 都我里座者」(九・10)・「座者苦毛」(十二・333)この二例のみみられるだけで後は、すべて「居」の文字を用いている。 「方、「キ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数を占め、次で「為」が多く、「座」の文字は少ない。今の場合は、「居」の文字で意図的に揃えようとしたものであろうか。以上、巻十三における一二七首の中から、一首中に同じ文字が使われ、それらが異なる訓みをしているものを選出して考察した。	本稿においても、歌をすべて漢字で記載する場合、記載者は一首一首
175、吾待居者 立居而 獨居而	をしているものを選出して考察した。
175、吾待居者 立居而 獨居而 175、吾待居者 立居而 獨居而 175、吾待居者 立居而 獨居而	る一二七首の中から、一首中に同じ文字が使われ、それらが異なる訓み
 「おした」の「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」	の文字で意図的に揃えようとしたものであろうか。以上、巻十三におけ
15、吾待居者 立居而 獨居而 15、吾待居者 立居而 獨居而	を占め、次で「為」が多く、「座」の文字は少ない。今の場合は、「居」
その時には、「なって「居」の文字を用いている。 そや」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだのでたひ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んでいるが、「マーン」と読んでも差支えないのではないか。「コーン」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだいるが、後のこでは、「ヲレ」の文字は、「座」の文字を用いている。 そのようには、「ラレ」の文字は、「座」の文字を用いている場合は、 そのようには、「ヨレ」の文字は、「座」の文字を用いている。	一方、「ヰ」についてみてみると、集中、やはり「居」が圧倒的多数
圭座者」(九・ǐlǐ)・「座者苦毛」(十二・ュタ��)この二例のみみらキには、「ヲレ」の文字は、「座」の文字を用いている場合は、そしたいが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだのでたレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだいるが、後の手には、「ヲレ」の文字は、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様吾待居者 立居而 獨居而	だけで後は、すべて「居」の文字を用いている。
Fには、「ヲレ」の文字は、「座」の文字を用いている場合は、Fレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだのでよるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の-三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様吾待居者 立居而 獨居而	
キレ」と近いが、自っころが、「吾待居者」 立居市	「ヲレ」の文字は、「座」の文字を用いている場合は、
は「ヰレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだのであろ「居而」と統一して「ヰレ」と訓んでも差支えないのではないか。「ヲレ」んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様に訓15、吾待居者 立居而 獨居而	うか。
「居而」と統一して「ヰレ」と訓んでも差支えないのではないか。「ヲレ」んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様に訓17、吾待居者 立居而 獨居而	は「ヰレ」と近いが、自分の動作であるから「ヲレ」と訓んだのであろ
んでいるが、「吾待居者」の「居」を「ヲレ」と訓んでいるが、後の句、三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様に訓17、吾待居者 立居而 獨居而	「居而」と統一して「ヰレ」と訓んでも差支えないのではないか。「ヲレ」
175、吾待居者 立居而 獨居而	三十三句からなる長歌の中に、「居」を「ヲレ」と「ヰ」と二様に訓
	17、吾待居者 立居而 獨居而